

多摩美術大学研究紀要

第34号

2019年

34

Tama
Art
University
Bulletin
2019

研究紀要委員会編

[共同研究報告]

《TAMA MON 22 — 多摩美術大学文様研究プロジェクト》

「アジアの装飾文様のアーカイブス化と教育活用に関する研究」から「日本とアジアの群島を結ぶ文様研究」へ

山形季央

佐々木成明

深津裕子

伊藤俊治

はじめに

本稿では、多摩美術大学共同研究「アジアの装飾文様のアーカイブス化と教育活用に関する研究」⁽¹⁾ (2017～2019年度)、学術研究振興資金「日本とアジアの群島を結ぶ文様研究」⁽²⁾ (2019年度)の成果報告を行う。以下、本研究活動を《TAMA MON 22 — 多摩美術大学文様研究プロジェクト》と総称する。本学共同研究の2017～2018年度の研究成果は本学研究紀要第33号で報告した⁽³⁾。2019年度は、まず多摩美術大学文様研究所(1973年設立)の研究成果の再検証を行い、本学アートアーカイブセンター(以下、AACとする)内での資料を保存した。次に筆者らが収集した文様資料を基盤に文様研究所資料を含め「アジアの群島を結ぶ文様アーカイブス」を構築した。そして3年間で費やし文様映画「インドネシア・バリ編」10作品を制作した。研究分担は、グラフィックデザインを研究代表者の山形季央(本学美術学部グラフィックデザイン科教授)、文様収集・映画制作・アーカイブス制作を佐々木成明(本学美術学部情報デザイン科准教授)、文様収集・文様研究所資料保存・報告書作成を深津裕子(本学美術学部共通教育教授)、文様収集・アートプロデュースを伊藤俊治(本学美術学部情報デザイン科客員教授/東京藝術大学大学芸術学部先端表現科教授)とした。

1. 文様とは

文様は世界をめぐる人と人をつなぐ。文様は文化の諸相をあらわし世界を美しく装飾する。人類誕生と共に現れる人間の最も始原的なヴィジュアルプレゼンテーションである文様は、神話・伝承・民話・宗教・民族の記憶を吸収し、様々なイメージを生み出してきた。仏教の蓮花・イスラム教のアラベスク・ゾロアスター教の生命樹・ヒンドゥー教のナーガといったシンボリックな文様は、紙・布・器・建造物・遺跡など多様な素材を装飾し、長い歴史と地理的な広がりをもたらしながら、コミュニケーションのツールとして人々の生活に浸透し美しく環境を彩ってきた。現在のアート&デザインも文様なくして語ることはできない。

2. 《TAMA MON 22 — 多摩美術大学文様研究プロジェクト》

本プロジェクトでは文様をアート&デザイン教育の重要なツールと捉え調査研究を行い教育活用を目指す。具体的には文様の位置情報などのデータを含めたデジタルアーカイブスの構築、映像作品の制作を通して、流動的かつ多面的で捉えどころがない文様から、人間の営みやアート&デザインの諸相を探究してきた。文様を新たな芸術資源として読み解き、アート&デザイン教育に活用することを目的とした本プロジェクトは「広く創造に関する諸問題を文様と研究を通して究明し、美術界に資することを目的」とした多摩美術大学文様研究所(1973年設立)

の活動を 21 世紀へと引き継ぐものである。文様研究所のインドネシア染織品やタイのバン・チェン土器コレクションは本プロジェクトで構築したアーカイブスに取り込み公開した。本学第 2 代目学長を務めた文化人類学者・石田英一郎（1903～1968）は「文様をして人間の創造の歴史を語らしめよ」という言葉を遺した。本プロジェクトではこの言葉と文様研究所の学術資源を受け継ぎ、22 世紀へ向けた新たな文様研究を行う。

3. 多摩美術大学における文様研究所の位置付け

1973 年、本学に設置された文様研究所規程⁽⁴⁾、研究組織と研究分担を示す。

多摩美術大学文様研究所規程

（設置および名称）

第 1 条 多摩美術大学に多摩美術大学デザイン文様研究所を置く。

（所在地）

第 2 条 多摩美術大学デザイン文様研究所は本部を東京都世田谷区上野毛 3 丁目 15 番 34 号多摩美術大学に置く。

（目的）

第 3 条 研究所は広く創造に関する諸問題を文様の研究を通して究明し、美術界に資することを目的とする。

（研究職員）

第 4 条 研究所に研究員（以下所員という）を置く。所員は多摩美術大学の教職員の中から法人が委嘱する。

（所長）

第 5 条 研究所に研究所長（以下所長という）を置く。所長は多摩美術大学の教職員の中から法人が委嘱する。所長は研究所を統括する。所長は所務を掌り、所員を司り、監督する。

（特別研究員）

第 6 条 研究所は研究の必要に応じて、他の機関に所属する研究者を法人の許可を得て特別研究員として当該研究に参加させることができる。

（研究費）

第 7 条 研究所運営に関する経費は主として各機関より研究助成金と法人への寄付金をもってあてる。

（細則）

第 8 条 所長は必要に応じ研究所の運営に関する細則を設けることができる。

附則 本規程は公布の日から施行し、昭和 48 年 4 月 1 日から適用する。

研究所長 山辺知行／多摩美術大学教授

研究員 江上波夫／上智大学教授・多摩美術大学講師

岡田譲／東京国立近代美術館館長

多摩美術大学講師

遠山啓／多摩美術大学講師

佐々木静一／多摩美術大学教授

大淵武美／多摩美術大学教授

田沢年美／多摩美術大学教授

佐々木剛三／早稲田大学教授

多摩美術大学講師

李正夫／多摩美術大学講師

円楽弘／多摩美術大学図書館主事

内海正和／多摩美術大学秘書室長

高橋史郎／多摩美術大学講師

特別研究員 アブドル・H・シャヒザデ（イラン考古学博物館館長）／増田精一（東京教育大学助教授）／ミカエル・E・ガヴォルスキー／ワンダ・G・ウォーミング

研究分担

○染織文様 山辺知行／大淵武美／内海正和／ミカエル・E・ガヴォルスキー／ワンダ・G・ウォーミング

○考古学文様 江上波夫／アブドル・H・シャヒザデ／佐々木静一／佐々木剛三／増田精一

○幾何学文様 遠山啓／高橋史郎

○工芸文様 岡田譲／円楽弘

○建築文様 田沢年美／李正夫

文様研究所は上野毛キャンパスに設置された研究所長 1 名、研究員 11 名、特別研究員 4 名からなる研究機関で、本学教員に加え学外の研究者も含む多彩な構成である。研究組織と研究分担を見ると、本学では 1970 年代より領域横断型の学術研究に着手していたことがわかる。外部活動資金⁽⁵⁾については、1974 年度の科研費⁽⁶⁾、1988 年度～2003 年度の本学共同研究費⁽⁶⁾が活用された。研究分担は、染織・考古学・幾何学・工芸・建築という、学術分野にこだわらないユニークな分類と言える。

筆者らは研究所の成果報告として 1974 年に発行された『文様研究報告書 1 日光東照宮建造物装飾文様調査報告 I』⁽⁷⁾（非売品）を確認した（図 1）。ここでは規程にある「多摩美術大学デザイン文様研究所」ではなく「多摩美術大学文様研究所」とある。この調査には田沢年美・大淵武美ら教授と助手および大学院生が参加し、調査項目を分担しながら文様を収集し報告書がまとめられた。文様研究所としての調査報告書はこの他に確認することができなかった。

『文様研究報告書1 日光東照宮建造物装飾文様調査報告I』
文様研究所, 1974年



図1 『文様研究報告書1 日光東照宮建造物装飾文様調査報告I』
文様研究所, 1974年

本研究所が発行した成果報告が少ない理由として、各所員が著者あるいは編者として雑誌記事や出版物に成果を発表したことが考えられた。例えば1976年、山辺知行所長が顧問を務めた財団法人遠山記念館付属美術館では「昭和51年特別展インドネシアの染織」展が開催された。カタログには本研究所が収集した5点の資料が「多摩美大蔵」として掲載されているものの、本研究所に関する記述は見られなかった。また1977年、染織文様を分担した大淵武美所員の編著書『桃山の文様』、『日本の唐草』、『日本装飾大鑑』などは文様研究所における研究成果の一部とみられる。1979年、1980年の本学案内には『多摩美術大学文様研究所』として収集資料が掲載され、山辺知行所長は研究所の概要を以下のように述べた（図2・3）。

今日、我々が眼にする装飾文様は、人類がその永い創造の歴史の中で生み出し、展開し、交流しながら守り続けてきた、貴重な文化遺産である。いうまでもなく文様は、常にそれぞれの民族・それぞれの時代・社会・風土と密接に関連しながら、人間の生活に深く関わり合ってきている。したがってわれわれはこの祖先から受け継いだ文様を、民族、人類の遺産としてただ単に継承するのみでなく、現代に適合する新たな文様を生み出し、多彩な文様展開の歴史に新たな一ページを創り出していかねばならない。そしてまた人間と文様の関わり合いを、文様の発生および展開の過程を少しずつでも明らかにすることによって、文様をして「人間の歴史」を語らしめたいと考え、私たちは文様研究所を設立し、美術史、工芸史、考古学、建築史、美学、社会学、文化人類学、デザイン、数学といった異なった専攻分野の研究者を集めて、その研究に着手しているのである。

その後の文様研究所に関する記録として、第7代目高橋史郎学長のウェブサイトで、文様研究所の組織形態や概要を示す書



図2 『多摩美術大学大学案内』多摩美術大学, 1979年, 30-31,
多摩美術大学文様研究所収集資料



図3 『多摩美術大学大学案内』多摩美術大学, 1980年, 30-31,
多摩美術大学文様研究所収集資料

類とともに幾何学文様研究に関するいくつかの成果が報告されていた。⁽¹²⁾

文様研究所が収集した全ての資料はその後、上野毛キャンパスから八王子キャンパスに移送され、研究所長および所員の退職後は、本学倉庫で保管されていた。インドネシア染織資料に関しては美術館が管理していたようである。研究支援部（現教務部研究支援課）およびAACの協力のもと、インドネシア染織品188点、タイのバン・チェン土器21点、その他アジア・中近東・中南米・ヨーロッパでの調査記録と思われる膨大な写真資料（ポジフィルム・ネガフィルム・紙焼き）、書類、文献資料等を確認し、2018年にAACに移送した。

染織資料の検証としては、2003年度に近藤秀實（研究代表者）が本学共同研究「文様の発生及び展開に関する総合研究（平成14/15年度）」を実施し、インドネシア染織品の目録『多摩美術大学文様研究所蔵インドネシアの染織品』を「多摩美術大学文様研究室」として発行した。⁽¹⁴⁾その後、インドネシア染織品が文様研究所により収集された資料であるという事実は曖昧になりながらも本学の学術資源として活用されていた。本学美術館では2014年「多摩美術大学美術館コレクション展インドネシアの染織—生活に伝承された彩と文様」展を開催し、インドネシア染織品を美術館コレクションとして展示した。⁽¹⁵⁾2017年、本共同研究に着手するにあたり本学美術館に連絡をとり、共通教育センター棟の倉庫で保管されていた染織資料188点の管理を引き継ぎ現在に至る。

4. 文様研究所が収集した資料の再検証・整理・保存

文様研究所関連資料の内容、保管された資料の現状については本学紀要第33号ですでに報告した⁽¹⁶⁾。これらを精査した結果、スライドフィルム資料と写真資料の多くには、調査時に撮影されたもので文化財を含む建造物、美術館・博物館・収集家の所蔵品、街並みや制作工程などが含まれていた。また写真やスライドフィルムには出版された書籍の図版を複写したものが多く研究プロセスにおける記録的意味が強かった。これらは調査年月日、収集地域を明記し表面清掃したのち新しい保存資材で収納し、将来的に温湿度管理された環境で保存できるような準備を整え、AAC4階の研究室の棚に保管する。

次に筆者らの研究対象であるアジアの装飾文様に関連する資料について検証した。インドネシアの染織資料188点は、1975年、染織文様を担当した山辺知之所長と内海正和教務部長が監修しながら、特別研究員であったミカエル・E・ガヴォルスキー、ワンダ・G・ウォーミングがインドネシア諸島を巡りながら購入した資料であったことがわかった。両特別研究員の所長への染織調査や、購入品に関する報告、教務部長への送金依頼や価格の提示などが書簡により判明し、当時の写真や各資料に関する記録も確認した(図④)。

一部の染織資料は先にも述べた通り1976年に学外で公開され、両特別研究員は、1981年に本研究所コレクションを図版に含む *The World of Indonesian Textiles* を出版した⁽¹⁷⁾。

インドネシアの染織資料については文様研究所としての成果報告書が見当たらなかった一方、活動成果は所長や特別研究員が学外で発表していた。また、インドネシアの染織資料のみならず詳細に記述された資料に関する情報や、収集時に撮影した記録写真などがあるにも関わらず公開されてこなかった。筆者らは過去の収集資料の情報を改めて総合的に精査し、過去の業績をわかりやすく公開できるような方法を検討した。



図④ 文様研究所のインドネシア調査に関する書簡および記録書類一式 (2019年7月1日、撮影：深津)

5. 本研究における文様研究所が所蔵した資料の利活用

日本とアジアの群島を結ぶ文様アーカイブスを構築するにあたり、2004年に発行されたインドネシアの染織品目録を再検証した。染織資料は文様研究所がインドネシア共和国のジャワ島・スマトラ島・バリ島・ロティ島・スンバ島・フローレス島・ティモール島で収集したもので、各島の文様の特徴を明示する貴重な資料である。当時の資料整理は筆者の一人である深津(当時、非常勤講師)と古沢典子が委託されて実施した。全景写真は撮影せず、部分的なスキニングを行った。資料調査の後、安全に保管する場所も確保されていなかったため旧保存箱として使用されていた茶箱に再度収蔵した。画像についてはデータも紛失されていたため新規撮影する必要があったが、目録情報については流用することにした。

本研究において、文様研究所アーカイブスを制作するにあたり、188点の資料の静止画撮影及びデータ化を専門家に委託し



図⑤ 文様研究所収集資料インドネシア染織品の写真撮影
監修：佐々木成明・深津裕子、写真撮影：斎藤彰英、撮影補助：横瀬愛 (2019年6月27日、撮影：深津)



図⑥ 文様研究所収集資料インドネシア染織品の写真撮影
監修：佐々木成明・深津裕子、写真撮影：斎藤彰英、撮影補助：横瀬愛 (2019年7月1日、撮影：深津)

た(図⑤⑥)⁽¹⁸⁾。また2017年に開館したアートテークギャラリー4階のAACにおいて、染織資料188点の一時保管場所を確保したため、資料は今後、表面清掃、加湿整形処置後に筒に巻き保存用資料箱に収蔵する予定である。⁽¹⁹⁾ 今後の課題として、安全かつ効率的に教育活用するために、閲覧スペースの確保と環境整備、貴重資料を取り扱う専門スタッフの育成など、AAC施設と連携した人材整備が必要となるだろう。

6. 文様ハンティング

筆者らはこれまでにアジアの群島、八重山諸島(日本)、ジャワ島・バリ島・スラウェシ島(インドネシア)、ルソン島(フィリピン)、台湾、シンガポール島(マレーシア)などで実施したフィールドワークにおいて文様を収集してきた(図⑦)。



図⑦ MONYO ハンティング(佐々木成明)
インドネシア共和国バリ島タバナン県ムンガイ地域タマンアウン寺院(2018年1月3日, 撮影: 深津)

各自がカメラやスマートフォンを活用して生活に根ざす文様を高画質画像で撮影し、付随する情報を記録する作業を繰り返した。1つの文様に対して、画像・文様名称・国名・島名・地域・収集場所・形態・収集日時を記録した。これらの情報を集積させながら、データベースの資料とし、データベースの構想とデザインを議論しながら検討した。

7. TAMA MON 22 on Web——アジア装飾文様データベース & 文様研究所アーカイブス

本研究で検証した「文様研究所」の研究成果をアーカイブス化し学術資源として有効活用する方法を検討した。筆者らの研究成果を総合的にまとめ、次世紀に向けた《TAMA MON 22 on Web——アジア装飾文様研究データベース&文様研究所アーカイブス》を構想し、その骨組みを構築した。《TAMA MON 22 on Web》の構成は、筆者らのフィールドワークに基づく研究成果を「アジア装飾文様データベース」、文様研究所のインドネシアに関する資料を再検証した成果を「文様研究所アーカ



図⑧ 《TAMA MON 22 on Web——アジア装飾文様データベース》
トップページ
<https://www.tamabi.ac.jp/research/tamamon22/>

イブス」にまとめ、総合的に活用できるような仕組みにした(図⑧)。

まず、研究対象地域を設定し本研究の趣旨にあるアジア圏の群島とした。第一段階で日本・台湾・フィリピン・インドネシアを選択し、第二段階で八重山諸島・マレーシア(シンガポール島)・タイ・ラオス・中国・インド・その他のアジア地域を加え、11地域を研究対象地域として設定した⁽²⁰⁾(図⑨)。

アジア装飾文様データベースでは、これまでに文様ハンティングにおいて収集した文様データを整理した。佐々木・深津・伊藤がこれまでに各地域で収集した文様、約1300点の画像と文字情報を整理し、データベースに入力した(図⑩)。また、文様映画シリーズ「インドネシア・バリ島編」で収録した映像作品からキャプチャーした画像から文様100点を加えた。

文様研究所アーカイブスでは、「4. 本研究における文様研究所が所蔵した資料の利活用」で示したインドネシア染織資料188点の画像(図⑪~⑱)に、アジア装飾文様データベースと同様の情報を加えデータベース化した。また、染織資料収集時の記録写真資料200点をスキャンし同様に情報を加えデータベース化した。

アジア装飾文様データベースと文様研究所アーカイブスの文様を合わせ、合計1,788点の文様データをリスト化した。そして、デジタルデータベースを構築し、収集した資料の取り込みと分類を行い、1,788点を超えるJPG画像を11の地域で分類



図9 《TAMA MON 22 on Web——アジア装飾文様データベース&文様研究所アーカイブス》データベース入力：横瀬愛，多摩美術大学メディア芸術コース研究室（2019年8月8日，撮影：佐々木）

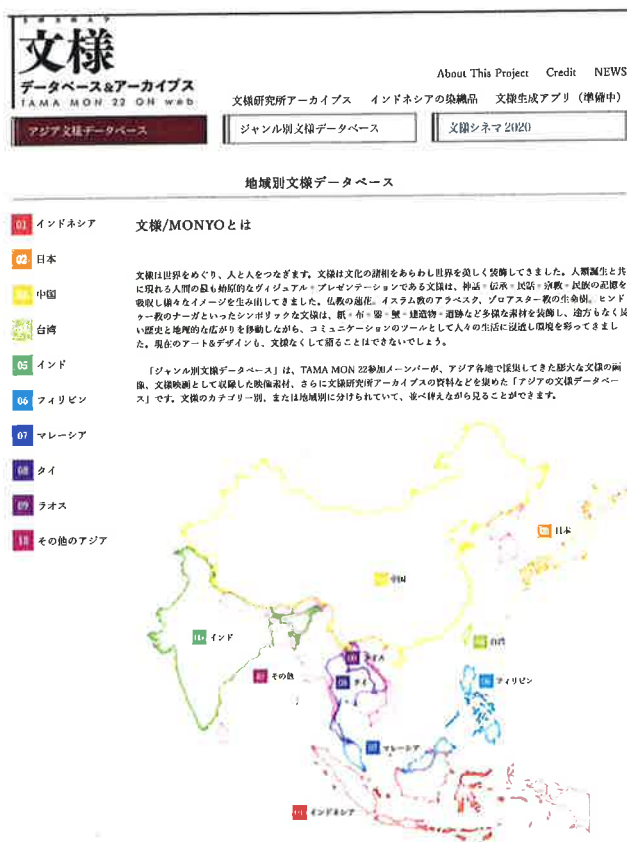


図10 《TAMA MON 22 on Web——アジア装飾文様データベース》地域別文様データベース 文様/MONYOとは MONYO Map <https://www.tamabi.ac.jp/research/tamamon22/map.html>

し，詳細な情報を入力した。文様を分類するため8つの文様カテゴリを形成し，植物・植物（花）・幾何学／抽象・空想生物・神話伝承・人間／文字・自然／宇宙・動物とした。アジア装飾文様データベース・のイメージ，文様研究所アーカイブスのイメージ画像を図19～22に示す。



図11 植物幾何学文様，経紵布，インドネシア・ロティ島，1974年，多摩美術大学文様研究所収集資料



図12 動物／植物／植物（花）／幾何学文様，経紵，インドネシア・スンバ島，1974年，多摩美術大学文様研究所収集資料

図13 幾何学文様，螺けつ染儀礼用布，インドネシア・スラウェシ島中部，トラジャ族，1974年多摩美術大学文様研究所収集資料



図14 植物（花）／幾何学文様，緯緋布，チュブック，インドネシア・ヌサブニダ島，1974年，多摩美術大学文様研究所収集資料



図15 植物／幾何学文様，経浮紋織布，インドネシア・サブ島，1974年，多摩美術大学文様研究所収集資料

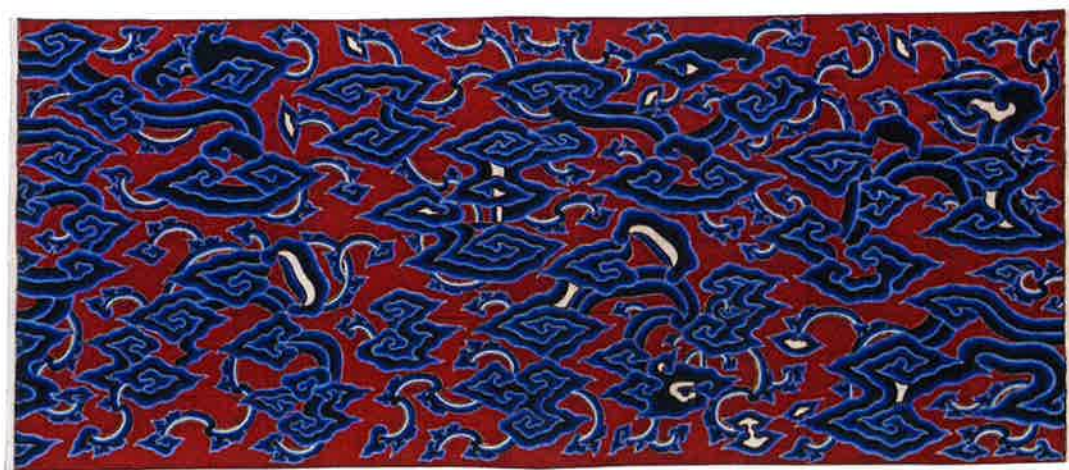


図16 雲文様／自然／手描パティック，インドネシア・ジャワ島チレボン，1974年，多摩美術大学文様研究所収集資料



図17 鉤文様／幾何学文様，経緋布，インドネシア・サブ島，1974年，多摩美術大学文様研究所収集資料

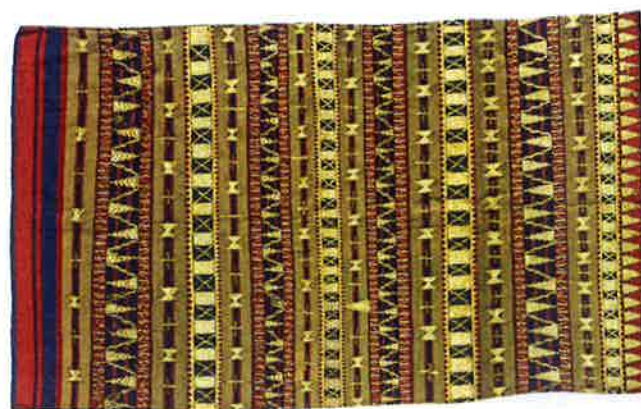


図18 幾何学文様，緯浮紋織，儀礼用腰布，インドネシア・スマトラ島パレンバン，1974年，多摩美術大学文様研究所収集資料

本データベースでは web ページ上の地域・文様カテゴリーによる選択によりデータをソートし、並びを替えて表示できるようにした(図19~22)。そのため本データベースでは、①地域ごとの文様をカテゴリー別で閲覧、②異なる地域の文様を同一カテゴリーに並べ閲覧することが可能となり、各文様の類似点と相違点を比較できることが特徴である。各文様には文字情報として、名称・素材(材質)、制作年代・用途・形態・寸法など詳細なメモを記載した。《TAMA MON 22 on Web》は随時データを追加し拡張する予定であるため、ウェブ公開データと同時にオンライン・スプレッド・シート(ウェブ・アプリケーション・ベースの表計算ソフト)によるデータベースを同時に構築した。



図19 《TAMA MON 22 on Web——アジア装飾文様データベース》
地域別文様データベース インドネシアの文様
<https://www.tamabi.ac.jp/research/tamamon22/map01.html>



図20 《TAMA MON 22 on Web——アジア装飾文様データベース》
ジャンル別文様データベース 文様/MONYO とは ジャンル一覧
<https://www.tamabi.ac.jp/research/tamamon22/genre.html>

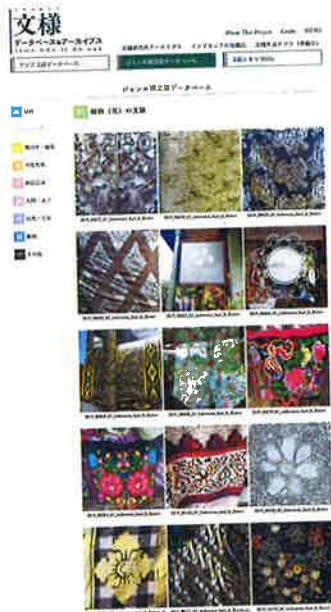


図21 《TAMA MON 22 on Web——アジア装飾文様データベース》
ジャンル別文様データベース 02 植物(花)の文様
<https://www.tamabi.ac.jp/research/tamamon22/genre02.html>



図22 《TAMA MON 22 on Web——アジア装飾文様データベース》
文様研究所アーカイブス 05 インドネシア調査の記録写真
<https://www.tamabi.ac.jp/research/tamamon22/archives05.html>

8. 文様映画シリーズ「インドネシア・バリ島編」

筆者らが1980年代後半より、アート&デザインの観点からインドネシアのバリ島で研究した成果から、文様研究的要素を抽出した。10作品では、宗教儀礼・神話・古典・美術・芸能・工芸(テキスタイル・仮面)などにみられる象徴的な文様を抽出し、文様を通して人と自然・文化・社会との関係性や世界のあり方を表現した(図23~29)。(21)



図28 上/タイトル画像 中・下/メインイメージ
No.1《チリとラマ 想像力を揺れ騒がす不思議な文様》
2017年制作、ディレクション/シナリオ：伊藤俊治、撮影：伊藤俊治・佐々木成明、ナレーション：山川冬樹、制作/編集：佐々木成明、コンボジット/MA：古屋和臣、グラフィックデザイン：山形季央

【概要】

「チリ」は美しい少女の姿を象った砂時計のような形の文様で、胴体と細い腕、大きな耳飾り、花の髪飾りからなり、寺院や家門の装飾に使われる。これは古くから伝わる土着的バリ様式の文様の一つで、生活の隅々に溶け込み人々の心を和やかにしている。

バリ島ウク暦の大祭であるガルンガンからクニンガンの期間にかけて、寺院や家々の門前、通りにはベンジョールという竹飾りや、「ラマ」と名付けられた椰子飾りが飾られ、チリ文様が美しく散りばめられている。チリは「可愛い」という意味をもつ、世界で最も美しい女性の抽象文様と言えるだろう。



図29 上/タイトル画像 中・下/メインイメージ
No.2《チュブック イカット文様に宿る魔除けの力》
2017年制作、ディレクション/シナリオ：深津裕子、撮影：佐々木成明、ナレーション：山川冬樹、制作/編集：佐々木成明、コンボジット/MA：古屋和臣、グラフィックデザイン：山形季央、撮影協力：Bapak I Ketut Ardana、ブラダレム・バンジャルサヤン

【概要】

「チュブック」は、マレー語で「イカット」と呼ばれる絛技法で文様を表した織物である。赤を基調に、ハート文様や花文様、ギギバロン（バロンの歯）と呼ばれる鋸歯文様などシンボリックな文様が表される。

バリ島ではチュブックは昔から禍や悪霊から人々を守ると信じられ、屋敷を守護する布、バロンダンスで魔女ランダを演じる者を守護する布として用いられた。チュブックは、ヒンドゥー教発祥の地であるインドから伝わった経緯絛「パトラ」から強い影響を受けた布で、文様やデザインに類似性が見られる。バリの人々は、インドからもたらされた貴重な布に、神が宿るとさえ信じ、その独特の文様や技法を模倣して自分たちのオリジナルの布チュブックを作りあげたのかもしれない。



図25 上/タイトル画像, 中・下/メインイメージ
No. 3 《ボレン バリ島の世界観を表す守りの文様》2018年制作, ディレクション/シナリオ: 佐々木成明, 撮影: 佐々木成明, ナレーション: 山川冬樹, 制作/編集: 佐々木成明, コンポジット/MA: 齋藤彰英, グラフィックデザイン: 山形季央, 撮影協力: ワヤン・スリアテ

【概要】

バリ島では「ボレン」という白と黒の格子文様の布が、寺院の神像や祭壇、神木に巻かれている。ボレンの白と黒はバリ・ヒンドゥーの基本概念を反映している。善と悪、昼と夜、生と死、太陽と月、光と影、すべての相対するものがバランスを取り合いながら共存しなければ、世界は成り立たないという。こうしたバリの世界観をボレンは象徴している。互いが存在することで、宇宙の万物が成り立つという考え方は、バリ・ヒンドゥーだけでなく陰陽の思想としてアジア全体で信じられている。ボレンと同じく黒と白が絡み合って円をなす太極図がこれを象徴する。バリ島が永遠に続いていくための文様、ボレンは人々の生活に深く溶け込んでいる。



図26 上/タイトル画像, 中・下/メインイメージ
No. 4 《グリーンシン 聖なる文様》2018年制作, ディレクション/シナリオ: 深津裕子, 撮影: 佐々木成明, ナレーション: 山川冬樹, 制作/編集: 佐々木成明, コンポジット/MA: 齋藤彰英, グラフィックデザイン: 山形季央, 撮影協力: Ibu Ni Wayan Sudiyan, (トゥガナン・プグリーンシンガン村), Ibu Ni Ketut Salin (ブクブク村), プラバンティ (バクサバリ村)

【概要】

バリ島の東部にバリ・アガの人々が住むトゥガナン・プグリーンシンガン村がある。「グリーンシン」はこの村だけで作られ、村人だけが着用できる神聖な織物である。細かい幾何学文様やパトラに由来する花文様、建造物文様、人物文様などが経緯緋(ダブルイカット)で緻密に織りこまれている。グリーンシンはバリ・ヒンドゥーの人々にとっても神聖でミステリアスな布として知られている。その深い赤色は「血染め」とさえ信じられたという。近郊の村で神輿を守護する布に使われるほか、グリーンシン・ワヤンは、危機に直面したバリ人を守護すると信じられ歯削りの儀式で使われる。神聖な文様と、それを織り出す宗教儀礼にも似た手間暇かかる手仕事、作る人の想いがグリーンシンに込められて神聖な布となったのだ。

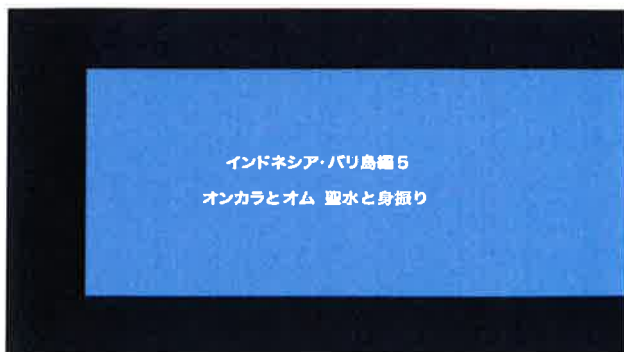


図27 上／タイトル画像 中・下／メインイメージ
No. 5 《オンカラとオム 聖水と身振り》2018年制作、ディレクション／シナリオ：伊藤俊治、撮影：伊藤俊治、ナレーション：山川冬樹、制作編集：佐々木成明、コンポジット／MA：齋藤彰英、グラフィックデザイン：山形季央

【概要】

バリでは今でも古代インドのサンスクリット語が大切な言語として人々の生活に浸透している。サンスクリット語には特別な呪力を持つ様々な音韻があり、それぞれの音が神々、色、方位と対応している。至高の言葉「オウム」はこのような要素を統合したもので、バリでは「オム」と発音される。「オンカラ」はこの3つの音を形にした不思議な文様だ。男性器を示す縦棒、女性器を象徴する三日月、両性具有のシンボルの円で構成され、魔除けや呪術に使われ、呪具や儀礼の品々にも遇られる。水の流れのようにも見えるオンカラは、聖水をつくる時にも欠かせない。聖水をつくる儀礼では、呪文と共に言葉を強調する手と指の動作が伴われる。僧侶の手や体の動きがオンカラをなぞり、その身振りが文様となるのだ。

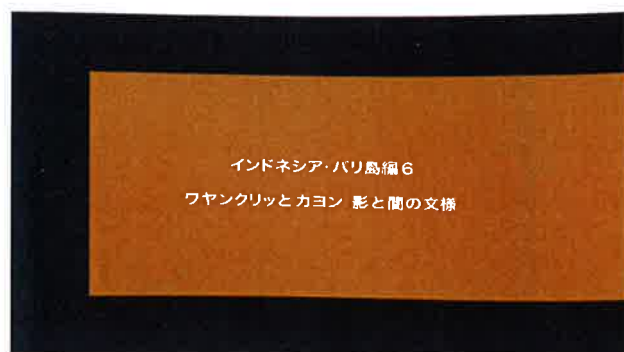


図28 上／タイトル画像、中・下／メインイメージ
No. 6 《ワヤンクリットとカヨン 影と闇の文様》2018年制作、ディレクション／シナリオ：伊藤俊治、撮影：伊藤俊治・佐々木成明、ナレーション：山川冬樹、制作編集：佐々木成明、コンポジット／MA：齋藤彰英、グラフィックデザイン：山形季央

【概要】

ヒンドゥーの大叙事詩「ラーマーヤナ」と「マハーバラタ」は、バリのダンスやドラマに大きな影響を与えた。最も有名な影絵「ワヤン・クリット」はダランと呼ばれる影絵師の操る人形により演じられ、スクリーンに神秘的影を投げかける。ダランは槌で、人形の箱を叩いてリズムを打ちだしそれを合図に演奏が開始される。やがて「カヨン」と呼ばれる生命樹の影がスクリーンに現れる。その奇妙な文様の輪郭は大きな樹のようで幹、枝、葉も識別できる。カヨンの神秘的な影は円を描くように揺れ動き、音楽の高低に合わせて波打ち獣のようにブルブル震えたり炎の揺らめきに形を歪ませばやけたりする。まさに変幻自在の生きた文様なのだ。影の文様であるワヤン・クリットは、バリの人々の精神世界の豊かさを詩的で繊細な動きと共に体感させる。最後には再びカヨンが現れて物語の終わりを告げ、影の文様の消滅と共にワヤン・クリットは深い闇に消えていく。



図④ 上／タイトル画像，中・下／メインイメージ
No.7《ナーガ 再生と生命力のシンボル》2019年制作
ディレクション／シナリオ：佐々木成明，撮影：佐々木成明，ナレーション：山川冬樹，制作編集：佐々木成明，コンポジット／MA：齋藤彰英，グラフィックデザイン：山形季央

【概要】

モンスーン・アジアの風土と自然環境から，独特の蛇信仰が成立した。蛇は風水思想における大地を司る龍にも繋がる。山波や，蛇行する川は龍に喩えられた。蛇は水のイメージにも深く結びついている。ヒンドゥー語で蛇を意味する「ナーガ」は，インド・ヒンドゥー教で，破壊と創造の神ヴィシヌスと深く結びつき，インド最古の聖典『リグ・ヴェーダ』にも頻繁に登場する。バリ島の寺院では頻繁に蛇の文様を見かける。ガムランの楽器にもナーガが遇らわれている。ナーガは忌み嫌われる悪しき存在ではなく，畏敬の対象としてバリ島だけでなく，アジア全域で崇拝されている。脱皮と再生を繰り返す蛇の生命力は，世界を生み出す無限のエネルギーや大地と結びつき，あらゆる生命の根源として信仰の対象とされ，文様となったのだ。



図⑤ 上／タイトル画像，中・下／メインイメージ
No.8《カーラと唐草 バリの石彫装飾》2019年制作
ディレクション／シナリオ：佐々木成明，撮影：佐々木成明，ナレーション：山川冬樹，制作編集：佐々木成明，コンポジット／MA：齋藤彰英，グラフィックデザイン：山形季央

【概要】

バリ島では神々や守護神を遇らったレリーフを至る所で見かける。石彫，木彫，銅像には，流動的でいくつもの動物や植物が絡み合い萌えあがるようなとめどないイメージが施されている。鬼のような面「カーラ」は，広くアジア全体に流布している聖獣「キルムーティカ」の文様と深く繋がりをもっている。キルムーティカはその威厳や栄誉を表すと共に魔除けの力をもつとされる。カーラの目は大きく，鼻は団子のように丸く，裂けそうに開いた口からは歯をむき出し下顎がない。カーラの周りは唐草文様や花文様で埋め尽くされる。唐草は豊穰や生命力の象徴，吉祥文様として世界中で知られる文様である。バリ島の石に刻まれた唐草文様は迷路のように入り組みながら，炎のように建物を包み込んでしまいそうな勢いがある。カーラと唐草はバリ島の豊かな自然と大いなる力を象徴し，寺院の建物を聖なる場所とする働きを担う。



図⑨ 上／タイトル画像 中・下／メインイメージ
No.9《バティックとクパヤ 植物を纏う》2019年制作
ディレクション／シナリオ：深津裕子，撮影：佐々木成明，ナレーション：山川冬樹，制作編集：佐々木成明，コンポジット／MA：齋藤彰英，グラフィックデザイン：山形季央

【概要】

熱帯の自然が織りなす花や草木の有機的なかたちはバリの人々の創造の源泉であり、生活のすべてを彩る。植物は様々な文化圏で古くから信仰の拠り所となり、生命樹はシンボリックな装飾文様となった。植物文様は美しい曲線を描きいきおい良く増殖し、その生命力の強さと洗練された美を様々な文化で表象する。インドネシアの「バティック」は生命の豊かさや神秘性、人々が自然と共生する様を一枚の布に表す。バリの人々は植物の文様で身体を装飾する。寺院に参詣する時、正装する時、あるいは制服として、生花を髪に飾り、植物文様を施したバティックやクパヤを身に纏う。植物文様が身体と一体化すると、布に描き出された有機的な植物の文様が身体にまわりついて第二の皮膚となる。身体の動きにあわせて植物文様の流れやリズムが奏でられ新たなデザインを創出させるのだ。



図⑩ 上／タイトル画像，中・下／メインイメージ
No.10《バロン 世界を救う森の聖獣》2019年制作
ディレクション／シナリオ：伊藤俊治，撮影：佐々木成明，ナレーション：山川冬樹，制作編集：佐々木成明，コンポジット／MA：齋藤彰英，グラフィックデザイン：山形季央

【概要】

森の聖獣バロンは、バリの人々から最も敬われている空想の動物である。森を支配する動物の王であるバロンには、災いや病を祓う大いなる力があるとされる。凶事が重なると、森から抜け出て、村の外れや通り、家々の門前を練り歩き、魔を祓うという。バリ島で、聖獣バロンと魔女ランダの戦いを中心に演じられるのがチャロナラン劇である。バロンとランダの戦いは延々と続き、決着のつかないまま両者は寺院の闇の奥へ消えていく。バリのアニミズムに根ざすバロンは、バリの村々を古くから守護してきた神秘の力を宿す偉大な聖獣なのだ。その力の流れがバロン文様の隅々に注ぎ込まれている。

1. 《チリとラマ 想像力を揺るがす不思議な文様》, 2. 《チュブック イカット文様に宿る魔除けの力》は, 2017 年 12 月に「平成 29 年度 MONYO21/22 研究成果発表シンポジウム 2017: 文様は世界をリンクする——多摩美術大学共同研究プロジェクト」を開催した際に本学内で上映した。また 2018 年 1 月にインドネシアのバリ島のテガララン・ゲントン村に於いて, 撮影協力者を含めた現地の人々に向けて同内容の発表を行った(図 33)。



図 33 《平成 29 年度 MONYO 21/22 研究成果発表シンポジウム 2017: 文様は世界をリンクする 多摩美術大学共同研究プロジェクト》, 映画上映&トークセッションの様子, インドネシア共和国バリ島ウブッド地域テガララン・ゲントン村 Arang-Arang House Bali 会議室において, 2018 年 1 月 4 日, 撮影: 深津

9. 「新世紀アジアの潮流——文様の創造力」展

本研究成果報告として, 《TAMA MON 22——多摩美術大学文様研究プロジェクト》「新世紀アジアの潮流——文様の創造力」展を本学アートテークギャラリー 2 階 202 号室で, 2019 年 11 月 20 日(水)から 2019 年 11 月 22 日(金)まで開催した(図 34)。主催は, 《TAMA MON 22——多摩美術大学文様研究プロジェクト》で, 多摩美術大学共同研究(2017~2019 年度)と学術研究振興資金(2019 年度)の助成により実施した。展示は, ウェブサイト《TAMA MON 22 on web——アジア装飾文様研究データベース&文様研究所アーカイブス》, 文様映画「インドネシア・バリ島編」全 10 作品, 「インドネシアとバリ島の多彩な文様」を表す実物資料の展示で構成し, アジアの群島文様の多彩な世界を紹介した(図 35~37)。

本研究の一つの主軸に教育的活用があるため本展では, 公開授業および合同授業を実施しながら, 学生および一般参加型のイベントとなるよう計画した。関連イベントとしてトークセッションとパフォーマンスを開催した。共同研究メンバーの他に協力を仰ぐ(図 38~39)。

トークセッションでは, プロジェクト・メンバーと村尾静二(プロジェクト協力者/清泉女学院大学人間学部文化学科講師)が研究報告及び総括を行い, 今後の課題とプロジェクトの未来について学生とともにディスカッションを行った。またパフォーマンスでは山川冬樹(本学非常勤講師/アーティスト)が「声の文様」という新しい文様のあり方を紹介した。



図 34 《TAMA MON 22——多摩美術大学文様研究プロジェクト》主催「新世紀アジアの潮流——文様の創造力」展ポスターデザイン: 山形季央



図 35 「新世紀アジアの潮流——文様の創造力」展ギャラリー展示: 染織資料・土器資料写真・文様ハンティング写真(2019 年 11 月 21 日, 撮影: 佐々木)



図36 「新世紀アジアの潮流——文様の創造力」展 ギャラリー展示全容（2019年11月21日，撮影：佐々木）



図37 「新世紀アジアの潮流——文様の創造力」展 収集した文様資料（2019年11月21日，撮影：佐々木）



図38 「新世紀アジアの潮流——文様の創造力」展 山川冬樹「声の文様」パフォーマンス（2019年11月22日，撮影：深津）



図39 「新世紀アジアの潮流——文様の創造力」展 公開授業 染織史2：深津裕子（2019年11月21日，撮影：横瀬）

10. 総括

「アジアの装飾文様のアーカイブス化と教育活用に関する研究」から「日本とアジアの群島を結ぶ文様研究」へと展開した《TAMA MON 22——多摩美術大学文様研究プロジェクト》の研究成果を，先行研究の検証，資料の保存，アーカイブス構築，文様映画制作により報告した．1973年に設立された多摩美術大学文様研究所の「広く創造に関する諸問題を文様と研究を通して究明し，美術界に資することを目的」とした学術的意義は大きく，まさに21世紀の美術大学における学術研究のあり方を問うていた．

筆者らは，第2代目学長で文化人類学者であった石田英一郎の「文様をして人間の想像の歴史を語らしめよ」という学術的姿勢を基盤に，「アジアの装飾文様のアーカイブス化と教育的活用に関する研究」と「日本とアジアの群島を結ぶ文様研究」を実施したことで，今後の課題をより鮮明にすることができた．

文様は民族や言語や世代を超えてコミュニケーションすることができるメディアである．筆者らは，文様の固有性をグローバル社会とローカル社会の両方に発信するために，文様を「デザイン」「パターン」などと翻訳せずに「文様＝MONYO」として研究情報を発信していく．そして，アート&デザイン教育を日本国内の高大学連携のみならず，アジアの小中高校生と大学教育が連携できるような，そして様々な地域の人々がMONYOを互いに理解し共有できるようなアート&デザイン教育のネットワークを形成していきたい．

おわりに

多摩美術大学文様研究所の趣意書にある通り，本学では1970年代半ばからすでに領域横断型の学術研究，文様という美術大学特有のヴィジュアルアーツを研究対象とした先駆的な美術研究に挑んでいたことがわかる．当時の研究所員らは「世界文様資料館」の開館を目指したようである．そして21世紀を迎えた今，筆者らは「文様」を「MONYO」と表記してグローバルに対応し，アート・データベース&アーカイブスという形で蓄積されてきた学術資源を公開し，世界各国の大学，博物館との文化交流のみならず，情報ネットワークを駆使したグロ

ーバルなアート&デザイン教育に着手することができた。これは大学の学術研究資源が世代や世紀を超えて蓄積され継承されてきたことを意味し、持続的な学術的財産の公開と活用として意義深い。1973年以来の多摩美術文様研究所の設立の趣旨は、2020年を迎える今、少なくとも達成されつつあるのではないだろうか。

謝辞

本研究を実施するにあたり、幅広い領域から多くの方々にご協力をいただきました。藤谷宣人前理事長、恩蔵昇前研究支援部長にはアートテーク設置段階より文様研究に関するご理解をいただきました。教務部研究支援課の長井祐馬氏には研究活動のサポート、アートアーカイブセンターには資料保存施設の提供、文様アーカイブスの公開についてご協力いただきました。また、インドネシア共和国のバリ島で文様映画を制作する際には、様々な地域社会の人々にご協力いただき、特に撮影をご承諾いただいたタバナン県バンジャルサヤンプラダレム寺院、カラングス県マンギスのトゥガナンブグリンシンガン村のIbu Ni Wayan Sudiyana、ブグブグ村のIbu Ni Ketut Salin、ギャニアル県テガラランのゲントン村のAlang-Alrang House (藤田裕二代表)、Green School BaliのBapak I Kadek Wirya、ドライバー／通訳のBapak I Wayan Sportに深くお礼を申し上げます。中でも故Bapak I Ketut Ardana前ゲントン村長には、現地調査のコーディネートや通訳をしていただきました。よき理解者、協力者、友として一緒に調査できたことは筆者らのかけがえのない財産です。ここにご冥福をお祈りします。



Bapak I Ketut Ardana, 11/1/2018

註

- (1) 多摩美術大学共同研究：山形季央（研究代表）・佐々木成明・深津裕子・伊藤俊治「アジアの装飾文様のアーカイブ化と教育活用に関する研究」

(2017～2019年度)。

- (2) 学術研究振興資金（日本私学学校振興・共済事業団）：深津裕子（研究代表）・山形季央・佐々木成明・伊藤俊治・村尾静二・金子あき子「日本とアジアの群島を結ぶ文様研究」（2019年度）。
- (3) 山形季央、佐々木成明、深津裕子、伊藤俊治「アジアの装飾文様のアーカイブ化と教育活用に関する研究」『多摩美術大学研究紀要』第33号、163-171、2018年。
- (4) www.tamabi.ac.jp/idd/shiro/egar
- (5) 科研費：山辺知行（研究代表者）「文様の発生および展開に関する総合研究」（X00080-945036）、一般研究（B）、1974年度（3,400千円／直接経費3,400千円）。
- (6) 多摩美術大学共同研究費：大淵武美（研究代表者）「文様の発生および展開に関する研究Ⅲ 江戸期の文様」1988年度、1999年度。
- (7) 佐々木静一、田澤年美、大淵武美他『文様研究報告書Ⅰ 日光東照宮建造物装飾文様調査報告書Ⅰ』多摩美術大学文様研究所、1974年。
- (8) 掲載された資料は1「花幾何学文様縹緞染め儀式用布（セレベス島中部トラジャ族）TAU-1974-001」、2「グリーンシンワヤン人物幾何学文様経緯縹緞儀式用肩掛布（バリ島トゥガナンブグリンシンガン村）TAU-1974-002」、3「花幾何学文様経緯肩掛布（フローレス島）TAU-1974-003」、4「霊船文様緯浮紋織儀礼用掛布（スマトラ島南部クロエ地方）TAU-1974-005」、5「首架動物文様経緯男性用腰布（スンバ島東部）TAU-1974-005」。
- (9) 大淵武美編『桃山の文様』毎日新聞社、1977年。
- (10) 大淵武美編『日本の唐草』光村推古書院、1978年。
- (11) 大淵武美（解説）『日本装飾大鑑』新版、全2巻、光村推古書院、1975年。
- (12) <http://www.shiro1000.jp/tauhistory/egami/rule83.html>
- (13) 筆者らが小林正夫学芸員（2017年当時）に染織資料の所在を問い合わせたところ、共通教育棟倉庫に保管されていた。
- (14) 近藤秀実・福岡（深津）裕子・古沢典子（編集制作）「多摩美術大学文様研究所所蔵インドネシアの染織品」多摩美術大学文様研究室、2004年。
- (15) <http://www.tamabi.ac.jp/museum/exhibition/140503.htm>
- (16) 註（3）、164
- (17) Wanda Warming, Michael Gaworski: *The World of Indonesian Textiles*. Kodansha International, 1981.
- (18) 染織資料の写真撮影については、学術研究振興資金の助成で2019年6月27日、6月28日、7月1日に実施した（監修：佐々木成明・深津裕子、写真撮影：斎藤彰英、撮影補助：横瀬愛）。
- (19) 染織資料の保存箱の制作は金剛株式会社に委託した。
- (20) デジタルアーカイブス構築については、学術研究振興資金の助成で実施した（監修／構成：佐々木成明、システム制作：古谷稔子、デザイン：林宏香、データベース制作：横瀬愛）。
- (21) 短編映像作品6本の編集制作は、2019年度本学共同研究の助成で実施した。
- (22) 発表場所：多摩美術大学八王子キャンパス図書館アーケード内。
- (23) 発表場所：インドネシア共和国バリ島ギャニアル県テガララン、ゲントン村、アランアランハウス会議所。参加者：佐々木成明・深津裕子・村尾静二・金子あき子・深津真彩・I Ketut Ardana・I Wayan Sort, Ni Nyoman。
- (24) 公開授業は、深津裕子が担当する共通教育科目／染織史2／環境文化運動論2で実施し、ギャラリートーク型かつ参加型の授業を行った。
- (25) 合同授業は、深津裕子が担当する大学院／染織文化特殊研究、佐々木成明・港千尋が担当する大学院／イメージ・ラボ研究指導Ⅰ&Ⅱ、伊藤俊治・佐々木成明・港千尋が担当する情報デザイン学科メディア芸術コース4年生／イメージ・ラボ卒業制作研究で実施し、トークセッション&パフォーマンスを学生参加型のイベントとした。